

山と博物館

「山と博物館」は自治会などを通じ全戸配布されるほか、市役所および関連施設で配置配布しています。また博物館公式 Web からご覧いただけます。

2023
秋号
第 68 卷 3 号

無料
Free

表紙の1枚 …………… 1
・大町山岳博物館 創立45周年記念
さんばく研究最前線 …………… 2・3
・クルマユリの花には、昆虫がやって
来るのか？来ないのか？
企画展特集 …………… 4
・「大町と絶滅動物」の見どころ

山博コレクション …………… 5
・ギフチョウの標本
付属園だより …………… 6
・キジバトってどんな鳥？
博物館のひろば …………… 7・8
展示・イベントのご案内 …………… 8



三戸呂拓也氏 講演会、
三戸呂拓也と行くフィールドゼミナール
～鷹狩山トレッキング～ を開催

大町山岳博物館友の会創立45周年を記念し、去る令和5年9月2日(土)～3日(日)にかけて、大町市で育ち、現在山岳に関わる映像制作やテレビ番組などでの登山サポートや運営、国立登山研修所講師として活躍されつつ、一方で世界の峻峰に挑み続ける登山家・三戸呂拓也氏をお迎えし、2日間にわたる講演会と登山を開催致しました。

2日、サン・アルプス大町で行われた講演会では「山が教えてくれたこと」と題し、大町高校山岳部、明治大学山岳部長としての数々の体験や失敗や教訓を通じ、チームワークの大切さとともに組織をまとめる大変さなど、聴衆の方々にとっても自分事として、これからの生き方・生き様を振り返る大変有意義な講演会であったとの感想を聞くことができました。県外からの参加者を含め170名余りの方々にご参加いただきました。

また翌3日は、「三戸呂拓也と行くフィールドゼミナール～鷹狩山トレッキング～」と銘打って、22名の登山参加者とともに鷹狩山に登りながら、学生時代にトレーニングを積んだ鎌ノ峰や鷹狩山の思い出を語っていただきました。

今回の講演会は、大町で育ち、故郷大町に少しでも恩返しができるかとのご本人の思いとも通じて、開催に至りました。三戸呂さんの活動記録や登山歴などにつきましては、ご自身でホームページを作成されておりますので、ご覧いただければと思います。今後とも山岳博物館では、こうした登山や自然に関する講演会などを開催してまいりますので、ぜひご参加をいただき、登山の楽しさや自然の奥深さ、不思議さを体験していただけるような機会を、ご提案できたらと考えております。また博物館友の会へご入会いただき、自然に囲まれたここ大町で、新しい友達とともに、新たな人生の楽しみを一緒に見つけていただけたら幸いです。

(大町山岳博物館 副館長 清水隆寿)

- ◆市立大町山岳博物館は、月曜日と祝日の翌日が休館です。ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休館となります。
- ◆開館時間は、午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)です。
- ◆毎月第3日曜日の「家庭の日」とその前日の土曜日は、「大町市民無料開放デー(長野県民割引)」として、大町市民の方は観覧料が無料です。また、この日は長野県民の方も団体割引料金で観覧いただけます。今季の該当日は10月14・15日、11月18・19日、12月16・17日です。この機会にぜひご来館ください。
- ◆次の方は通年、いつでも博物館を無料で観覧いただけます。《障がい者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名/未就学児/大町市内小・中学校に通う児童・生徒/大町市内在住の65才以上の方と高校生》
このほかにも観覧料の各種割引があります。詳しくは受付窓口でお尋ねください。



博物館施設案内
はこちら

クルマユリの花には、 昆虫がやって来るのか？来ないのか!?

クルマユリ *Liium medeoloides* の花期は6～7月で、花粉の送受粉を担う昆虫については、チョウともマルハナバチとも言われていますが、じつはまだ明らかにされていません。

そこで、2023年7月28～29日にかけて、白馬岳でクルマユリの花にやってくる昆虫の観察を3回（1回につき2時間）行いました。

観察したときは、花の最盛期で200以上の個体が1～数個の花を咲かせていたと考えられます（写真1）。周囲ではマルハナバチがクルマユリ以外の花で忙しく花粉を集め、チョウが蜜を求めてやってきていました。しかし、クルマユリには、マルハナバチもチョウも一切、訪れませんでした。訪れたのはハエ目の昆虫（写真2）で、花から花へ移動する姿はほとんど見られないうえ、たまに訪れるだけでした。

なぜ、チョウもマルハナバチも訪れなかったのでしょうか。



▲写真3 コオニユリの花にやってきたミヤマカラスアゲハ

写真2 花被片をなめるハエ目の1種



◀写真4 ササユリの花にやってきたエゾシモフリスズメ

例えば、花被がオレンジ色で黒紫色のまだら模様が共通する湿地に生育するコオニユリの一例をみると、花被は午前2時台後半から3時台に開きはじめます。葯は6～7時台に開きはじめ、花粉が現れます（千葉ほか2022）。花にはアゲハチョウ類が訪れ、花粉の送受粉を担います（写真3）。

つぎに、夜行性のスズメガやヤガといったガ類が訪れるササユリ（写真4）でみると、花被は日中に開きはじめ、夕方までに大きく開き、夕方に近づくにつれ香りが強くなります（千葉・清水2004）。

写真1 最盛期を迎えたクルマユリ（背景写真）



▲写真5 大きく開きつつある花被
(午前6時 撮影)



▲写真6 開きはじめた葯にはオレンジ色の花粉が見える(午前7時 撮影)

クルマヨリの花被は午前6時にはすでに、平開～やや閉じ気味の状態で、葯が開きはじめたのは早い個体で7時頃でした(写真5および6)。

ユリ属植物の開花が花粉を媒介する昆虫の活動に合わせて生じていると仮定できるのであれば、クルマヨリの花被が開きはじめている頃には、すでにマルハナバチは忙しくほかの花で活動をはじめているので、ずれているようにも思えます。しかし、花粉を集めるだけであれば、たとえ葯が開くのとマルハナバチが活動を始める時間帯がずれていたとしても前日やそれよりも前に開花した花で、花粉を集めることは十分に可能なはずですが、マルハナバチが花を訪れる姿は確認できませんでした。

一方、チョウが群落に飛来したのは7時頃からで、葯が開く時間帯でもありました。しかし、チョウがクルマヨリの花を訪れることは一度たりともありませんでした。また、チョウ目がやってくるのかは、柱頭への体毛の付着の有無で確かめることもできるので、いくつかの花を撮影して調べてみましたが、見当たりませんでした。

今回の観察では、花粉を媒介する昆虫を明らかにすることも、手掛かりを掴むことはできませんでした。それは、観察の回数が少ないからなのかもしれません。そのため、調査を継続することで、この先見つけることができるかもしれませんし、クルマヨリは山地帯にも生育しているので、それらとの比較も必要です。その結果、やはり見つからないということになれば、恐らく新たなアイデアがそこで浮かび、研究は前進するものと思われれます。

市立大町山岳博物館 学芸員 千葉悟志

【引用文献】

千葉悟志・四方圭一郎・有川美保子・宮澤陽美・板橋和子(2022)
コオニユリの生活史およびアゲハチョウ類との関係について—日本産草本植物の生活史研究プロジェクト報告第13報—。市立大町山岳博物館研究紀要7:17-24。

千葉悟志・清水建美(2004)
長野県準絶滅危惧ササユリの生活史および訪花昆虫—日本産草本植物の生活史研究プロジェクト報告第4報—。長野県植物研究会誌37:1-8。

【謝辞】

この度の調査では、白馬山荘(株式会社 白馬館)の支配人・スタッフの皆様にお世話になりました。ここに記してお礼申し上げます。

「大町と絶滅動物」の見どころ

開催期間 11月3日(金・祝)～1月28日(日)

栗林 勇太

はじめに

本企画展では、県内でも数少ない絶滅動物の標本を展示し、主に近代以降に絶滅した大町市や旧北安曇郡の絶滅動物と、その時代の人との関わりを解説します。

絶滅動物

①ニホンオオカミ



写真1：上田高校収蔵のニホンオオカミの頭骨



写真2：当館蔵「ヤマイヌ」と呼ばれる鼻先部分の骨

県内で数点しか確認されていないニホンオオカミの頭骨。そのうちの一つを展示します(写真1)。

ニホンオオカミは本州、四国、九州に広く生息していたものの、明治末頃に絶滅したとされています。オオカミという名前は、民話の形で国内に数多く残っているものの、県内で発見されている実物は多くありません。

北安曇郡内では実物は発見されていないものの、ヤマイヌと称されて魔除けに用いられた骨(写真2)が残っていたり、送りオオカミや産やしね(オオカミに子供が生まれると、赤飯を焚いて持っていく)などの言伝えが残ります。

上記の他に、オオカミにまつわる様々な資料の展示を通して、北安曇郡内各所に点在する様々な痕跡を紹介します。

②ニホンカワウソ

2012年に環境省が絶滅を宣言。長野県を含む本州全土では、1954(昭和29)年が最後の捕獲記録になります。北安曇郡内で唯一確認できる実物は、1882(明治15)年に、仁科三湖で採取したとみられる頭骨で、アメリカ・スミソニアン協会国立自然史博物館に収蔵されています(写真2)。



写真3：アメリカ・スミソニアン協会国立自然史博物館に収蔵のカワウソの頭骨(写真提供：河合久仁子氏)

ニホンカワウソは、かつては水辺などに身近な存在として暮らしていたものの、明治時代に毛皮の乱獲等により、その個体数は大幅に減少し、絶滅に至りました。県内でも多くの個体が捕獲されたことが、統計資料からわかりま

す。北アルプスの黒部川上流などでは、昭和の中頃くらいまでカワウソの鳴き声を聞いたという証言が残ります。様々な目撃情報等も交え、この地域におけるニホンカワウソについて解説します。

③トキ

市の指定文化財である、トキの剥製(写真3、大正時代、大町市美麻産)を展示します。

明治時代には本州各地に生息していたものの、狩猟などにより個体数が激減し、2003年に絶滅。かつては大町近郊でも生息していたことが、剥製などから確認されています。



写真4：当館蔵トキの剥製(1920年、大町市美麻産)

他地域には生息しているが大町市から姿を消した生き物

県内では生息しているものの、大北地域では確認されなくなった動物もいます。ブッポウソウは、県内数ヶ所で現在も生息しています。過去に市内でも生息が確認されているものの、現在姿を見ることはありません。これらの動物について、剥製を用いながら紹介します。



写真5：当館蔵ブッポウソウの剥製(1953年、大町市社産)

絶滅が危惧される動物

ライチョウを始めとして、絶滅が危惧されている動物は多く存在します。個体数が減少した要因は様々ですが、明治以降に理科教育用に様々な動物が剥製用に採取されたことも、一つの要因として考えられます。

絶滅危惧種とその保護事業について、当館のライチョウ保全事業を中心に紹介します。

今生きている動物を守るために、これから我々が動物とどんなつきあい方をしていくかは、重要な問題です。絶滅動物や、当時の人々と動物の関わりに目を向けることは、この課題を考えるための重要なヒントになります。(市立大町山岳博物館 学芸員)



写真6：当館蔵ライチョウの剥製

ギフチョウの標本

清水 博文

山岳博物館には昆虫標本として、ドイツ箱と呼ばれる標本箱で258箱、その他にまだ標本に作製していない昆虫が4,600点ほど収蔵しています。今回はその中で、大町市では絶滅してしまったギフチョウの紹介をします。

ギフチョウは、日本特産種（日本だけにいる種）で、最初に発見された地が岐阜県だったため、ギフチョウと名づけられています。長野県には、アゲハチョウ科のギフチョウとヒメギフチョウの2種が早春の山麓で見られるチョウとして分布しています。



上：ギフチョウ
（大町市平黒沢 昭和36年5月7日）
下：ヒメギフチョウ（小谷村産）

長野県版レッドリスト（2015）では、両種とも準絶滅危惧（NT）の『現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては絶滅の危険が高くなる要素を有する種（生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断される種）』にされています。

両種はとても近縁であり、交雑個体も確認されていますが、基本的に両種の生息地は分れています。両種のすみ分けをしている分布境界を線で結んで、ギフチョウの属名である *Luehdorfia*（リュードルフィア）より、ギフチョウ属線（リュードルフィアライン）と呼んでいます。同じ場所に両種がいる混生地は秋田県、山形県、新潟県、長野県・小谷村白馬村・飯山市などと限られています。

大町市には、かつて、ギフチョウとヒメギフチョウの両方が分布していました。昭和24年5月26日に、大町市平黒沢でギフチョウが発見され、個体数も多かったとの記録があります。黒沢高原は、北安曇郡におけるギフチョウの最南の分布地でありましたが、昭和40年頃から姿を消してしまいました。大町市史 第1巻（自然環境）によると、その生息地では昭和30年後半から40年初頭に観光開発事業が行われたことにより、発見からわずか十数年で姿を見ることができなくなってしまったとの記述があります。

その後、私もこの地でギフチョウを探していますが、再発見には至っていません。

ヒメギフチョウについては、大町市において山麓のチョウとして生息していますが、生息地は点在しており環境の変化などによる個体数の減少を心配しています。

今回ご紹介した博物館に収蔵している8個体あるギフチョウの標本は、かつて大町市にも生息していた証拠としてとても貴重な標本といえるでしょう。

（市立大町山岳博物館 館長補佐）

付属園だより キジバトってどんな鳥？

《キジバトのうずら 展示室デビュー》

2023年の4月にキジバトのうずらが展示室にお引越しをしました。うずらは2010年の8月に巣から落ちていたところを保護されました。園路からは見えにくい位置での飼育が続いていましたが、現在は付属園の入口近くでお客様を出迎えてくれています。キジバトなのになぜ名前がうずらなのか…？それは保護されてきてまもなく、まだ幼鳥だった頃のうずらがキジバトの成鳥とはかけ離れた姿をしており、当時の飼育員が「うずらみたい」と思ったからだそうです。



《キジバトについて》

学名は「*Streptopelia orientalis*」で、「東洋のキジバト」を意味します。世界のキジバト属の多くは、頸に特徴的な模様があり、「*Streptopelia*」は「首飾り」の意味を持ちます。キジバトは別名「ヤマバト」とも呼ばれています。市街地から山地にかけての広い範囲で見ることができ、多くは一年を通してつがいですべて生活しています。「デーデーポッポー」とゆっくりとしたテンポで鳴きます。キジバトが鳴くのは、なわばりの宣言

と求愛のためだそうです。キジバトの鳴き声が聞こえたら高い木の上などを探してみてください。どこかでキジバトが鳴いているかもしれません。他のキジバトに鳴き声が聞こえるように、鳴き声が良く届く高い場所で鳴いていることが多いそうです。うずらは近付くと鳴くのをやめてしまうので、鳴き声が聞こえたらラッキーです。稀に飛び立つときなどに小さく「プゥ」と鳴くのがとても可愛らしいです。

《キジバトの体の特徴》

目の周りは皮膚が露出して赤い。

体に比べて頭部は小さい。

細長く少し曲がった嘴は、木の実や種を一粒ずつつまんで食べるのに適している。飲み込んだ餌はそのうと呼ばれる胃にため込まれる。ハトの仲間はそのうが発達している。

翼は茶色と黒色の鱗模様でこれがキジのメスに似ていることから「キジバト」と名付けられたと考えられている。

頸元には青灰色と紺色の縞模様がある。



《日本で見られるハトの仲間》



カワラバト

もともと日本におらず、伝書鳩などとして飼育されていたものが再び野生化したもの。群れで過ごすことが多く、公園や駅前などの街中でも見ることが出来る。黒や白の羽をもつものや、斑のあるものなど個体によって差がある。



アオバト

海水を飲むハトで、かつてはキジバトと同じように「ヤマバト」とも呼ばれていた。夏期に海水を飲むのは、不足するミネラルを補うためではないかと考えられている。神奈川県天然記念物に指定されている。



シラコバト

キジバト属のハトで、首には黒い線が入る。1956年に国の天然記念物となった。関東地方の一部に留鳥として分布する。日本で見られるキジバト属のハトは、キジバトとシラコバトの他にベニバトがいる。

(飼育員 渡邊咲晴)

ナラの葉採集

令和5年5月20日(土)



当館のライチョウは、ナラの葉を使用した特性の配合飼料を与えています。飼育しているライチョウの1年分のナラの葉を採集するのはたいへんですが、毎年松本山雅後援会の皆様に採取のご協力をいただき、無事必要量の確保ができています。ナラの木の提供や伐採には千年の森自然学校に、葉の乾燥には池田町のハーブステーションのPolarisAct様にご協力をいただき、多くの方々の協力があってライチョウを飼育することができています。今年もぐるったネットワーク大町の方々にも、採取のご協力をいただきました。

第124回中部ブロック 飼育技術者研修会に参加しました

令和5年6月21日(水)、22日(木)



第124回中部ブロック飼育技術者研修会が静岡県の浜松市動物園で開催され、17園館、22名が参加しました。2日間を通して研究発表が行われ、各園館が取り組んできた研究の成果を発表し、さらなる飼育技術の向上を目指し交流を行いました。園内施設の見学では、研究発表の供試個体群となっていたミーアキャットの飼育舎で、実際に研究課題にどのように取り組んでいたか、飼育の工夫などについてのお話を聞くことができました。この研修で得られた知識を今後の飼育に活用していきたいと思えます。

雪形ウォッチング

令和5年5月21日(日)



第22回「北アルプス雪形まつり」～吉丸一昌生誕150周年記念「早春賦の世界」と題した雪形ステージが6月10日(土)大町市文化会館で多くの来館者が迎え盛大に行われましたが、その一環として今年もイベントの名称にもなっている「雪形」を学ぼうと、現地で雪形を学ぶ雪形ウォッチングが開催されました。参加者14名のうち、10名の方が県外や松本市、安曇野市から参加されるなど、地元以外にも北アルプスの雪形に関心を寄せられています。

このほか市内温泉郷ホテル6館などでも期間中、雪形パネル展示が行われました。

キャンプ学習に学芸員を 派遣しました

令和5年7月6日(木)、7日(金)、11日(火)



毎年、パネルや実物を示しながら実施している「青木湖なぞ解きウォークラリー」を、白馬南小学校、大町西小学校、大町北小学校の5年生を対象に実施し、学芸員を2名派遣しました。青木湖の成り立ちや縄文人と青木湖の関わり、周辺の動物について、クイズを解きながら学習していただき、「クイズが楽しかった」「もっと昔のことを知りたくなった」などといったお声をいただくことができました。身近な自然である青木湖について楽しみながら理解を深めていただくことができたのではないかと思います。

鷹狩山でササユリを観察しよう

令和5年6月18日(日)



4月に引き続き大町自然探検隊を鷹狩山で開催いたしました。この季節、鷹狩山にはササユリが咲き、登山の楽しみの一つとなっています。当日は仁科林道から登り、山頂に至る間、ササユリを参加者の皆さんとともに観察しました。ササユリの花は夕方までに花被が大きく開くこと、それとともに匂いが強くなること、花にはスズメガが訪れ、訪花は種子をつくるには欠かせないこと、芽生えてから開花に至るまで5～7年かかることなど、博物館のこれまでの研究をもとに解説させていただきました。

企画展「ホネ展」 ミュージアムガイドを開催

令和5年7月15日(土)



4月29日から7月30日まで開催している企画展「ホネ展」の内容を学芸員が解説するミュージアムガイドを実施しました。午前と午後の2回行い、計30名の方にご参加いただきました。参加者からは「鳥の目の中に骨があるなんて知らなかった」「知らなかったことをたくさん知れて面白かった」などのご感想をいただくことができました。骨の役割や進化の過程で生じた共通点・相違点等といった骨の魅力をお楽しみいただけたのではないかと思います。

山岳総合センター共催事業に 学芸員を派遣しました

令和5年7月27日(木)



長野県山岳総合センターとの共催事業「わくわくチャレンジ教室 夜の虫を観察しよう」に当館学芸員を派遣しました。小学生を対象とした内容で、昆虫とはどのような生き物かの説明の後、大町公園周辺で、昆虫を集めるためにエサや光を用いたトラップ(わな)を使い、夏の夜の昆虫採集を体験しました。紙コップに落ちた地上を歩く虫を探したり、ペットボトルを用いたトラップに入ったカブトムシやコクワガタ、ブラックライトや蛍光灯に飛んできたミヤマカミキリなど観察できました。夏休みの自由研究の参考にもなったことと思います。

みんなで温暖化ウォッチ 「セミの抜け殻を探せ！」

令和5年8月1日(火)



長野県環境保全研究所と共催で、セミに関するイベントを行いました。このイベントは、セミの抜け殻を集めて、抜け殻から種類を同定する内容で、毎年行われています。またその記録は、温暖化が生き物に及ぼす影響を調べることにも使われています。

参加者は大町公園にてセミのぬけがらを集めた後、当館講堂にて分類を行いました。抜け殻の中で最も多く集まったアブラゼミを始め、標高の高いところに生息するエソゼミなど、計262個の抜け殻が見つかりました。子どもたちが、楽しみながら抜け殻を探したり分類したりしている姿が印象的でした。

令和5年度博物館実習の 受け入れを行いました

令和5年7月30日(日)～8月4日(金)



山岳博物館では、学芸員の資格取得を目指す大学生を対象として、博物館実習の受け入れを行っています。本年度は4名の実習生を受け入れ、調査・研究、収集・保管、教育普及・展示を軸とした学習を通して、博物館の仕事について学んでいただきました。また、最終日には6日間の集大成として実習生同士で各々が工夫を凝らして考えた館内のガイドを行っていただくなど有意義な6日間となりました。

来年度以降も実習の受け入れを予定しており、将来学芸員を目指す学生の支援を続けてまいります。

展示・イベントのご案内

大町自然探検隊 親子地学教室

「河原の石ころをさがそう」

北アルプスの山々から高瀬川支流の籠川に流れついた石を観察して、北アルプスの成り立ちを考えます。

- 期日 10月22日(日)
- 時間 9時00分～11時30分
- 場所 籠川下流の河原
- 対象 小学生とその保護者
- 定員 10組(先着)
- 費用 1組500円
- 申込み 参加者の氏名・住所・電話番号・生年月日を電話・FAX・Eメールまたは直接当館へ
※9月22日(金)より受付開始

企画展「大町と絶滅動物」

ミュージアムガイド

担当学芸員が展示の概要などを解説

します。

- 期日 11月3日(金・祝)
12月2日(土)
令和6年1月7日(日)
- 時間 10時30分～
14時30分～
(どちらも20分程度)
- 会場 当館 特別展示室
- 対象 どなたでも
- 費用 無料(ただし、通常の入館料が必要となります)

企画展関連講演会

「ニホンオオカミを探し続けて50年」

長年に渡ってニホンオオカミを探し続けた、ニホンオオカミを探す会代表の八木博氏をお招きした講演会。

- 期日 11月11日(土)
- 時間 13時30分～15時30分
- 場所 当館 講堂
- 対象 どなたでも
- 定員 40人(先着)
- 費用 無料

- 申込み 10月5日～参加者の氏名・住所・電話番号を電話・FAX・Eメールまたは直接当館へ

ワークショップ

信州の昆虫を食べよう!

昆虫食文化の残る大町で、実際に昆虫食を食べながら、地元の文化や人と生き物のつながりについて学びます。

- 期日 12月9日(土)
- 時間 9時～12時
- 場所 山岳総合センター
- 対象 どなたでも
- 定員 20人(先着)
- 費用 300円/人
- 主催 山岳総合センター(当館共催)
- 申込み 山岳総合センターへ事前申込み TEL:0261-22-2773

編集・発行



— 創立 1951年 —

〒398-0002 長野県大町市大町 8056-1
市立大町山岳博物館 編集責任者 鈴木啓助
TEL.0261-22-0211 FAX.0261-21-2133
✉ E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:https://www.omachi-sanpaku.com

2023

発行日 2023(令和5)年9月15日

秋号

第68巻3号

印刷 有限会社北辰印刷
〒398-0002 長野県大町市大町 3871-1
TEL.0261-22-3030 FAX.0261-23-2010